

ジャンルなき孤島、 アイスランド音楽のいま

小倉悠加 (音楽ジャーナリスト) Yuka Ogura

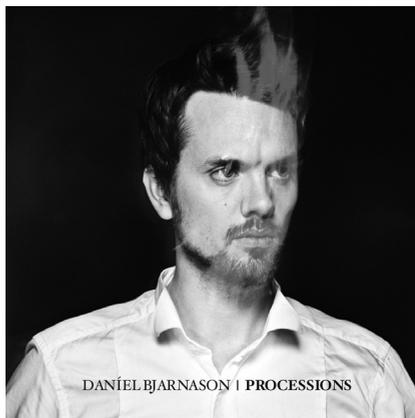
アイスランドは国土の一部が北極圏にかかる大西洋の孤島だ。小国ではあるものの芸術文化活動は盛んで、音楽大国とも言われて久しい。総人口34万人ではあるが、国際的に人気の高い音楽アーティストが続々と登場している。

ポピュラー音楽では、国際的に大活躍する**ビョーク**や**シガー・ロス**が存在し、夏になれば欧米へのツアーや夏フェス参加で、アイスランドから100組以上のアーティストが海外へ出ていくのも恒例だ。日本も例外ではなく、若手では**オブ・モンスターズ・アンド・メン**や**アウスゲイル**、**カレオ**等がフジロックやサマーソニックなどの大型夏フェス・デビューを飾っている。

近年ではポスト・クラシカル界からの進出も多く、**ヨハン・ヨハンソン**はゴールデン・グローブ賞を受賞し、**オーラブル・アルナルズ**は20代でブリット賞に輝き注目を浴びる。そしてクラシックでは今回、日本で初公演を行う才人**ダニエル・ビャルナソン**の活躍が目覚ましい。

クラシックとは書いたものの、彼をそのジャンルに収めることはできない。2010年デビューアルバム『プロセッションズ』はネオ・クラシックとエレクトロを融合させた斬新な作品であり、全

般にクラシカルな響きはあれどクラシック・コンポーザーの域を大胆に越えていた。続く2012年の作品もタルコフスキー監督映画『惑星ソラリス』のサウンドトラックのリメイク版で、**ダーク・ノイズ**の先端を走る**ベン・フロスト**との共作だった。ジャンル分けができないのはアイスランド音楽全般に言えることで、特に彼が所属する**ベッドルーム・コミュニティ・レーベル**はそれをもっとも顕著である。



©Bedroom Community Record
デビューアルバム『プロセッションズ』

ここで少しアイスランドの音楽シーンについて紹介したい。アイスランドが音楽大国と言われる、大量のアーティストを輩出する背景のひとつに、規模が小さすぎるためジャンルの棲み分けがない事実がある。

例えを挙げよう。アイスランドには1990年代になるまでサクソ奏者がいなかった。現在音楽学校でジャズ部門を総括する学部長は、幼い頃に聴いたジャズに感銘を受けサクソを学ぼうとしたが、国内にサクソ奏者が存在せず他の管楽器の先生から音の出し方を教えてもらう程度だったという。彼はアメリカで本格的にサクソを学び、ニューヨークでジャズ奏者としての修行を積んだ後に帰国。国内で唯一のサクソ奏者となった。なにせ一人しか居ないのだ、ジャンルを選り好みしている余裕はない。依頼があれば結婚式でも葬儀でも演奏にはせ参じる。話し声で音楽がかき消されるような賑やかな場でも、その機会をありがたく思い演奏すると彼から説明された時、ジャンル内での演奏にこだわる日本に育った筆者は大いにショックを受けたものだ。

考えてみれば楽器が一台しかない、奏者が一名しかいないとなれば、確かにクラシック奏者なのでジャズは対応できない、ポピュラー専門なのでクラシックは苦手とは言ってられない。一事が万事そうなので、アイスランドではジャンルにこだわる考え自体が希薄だ。実際、アイスランド交響楽団の第1ヴァイオリン奏者が夜はロックンローラーに変身したり、楽団員とヘビーメタル・グループが共演したりしても奇異だとは受け止められない。サウンドトラック界の巨匠となりつつあるヨハン・ヨハンソンのデビューはバンク・バンドであったし、同じくネオ・クラシックで才気を放つオーラブル・アルナルズも、かつてはヘビーメタルのドラムスだった。

楽器も人材も限られる孤島であるため、ジャンルも役割もクロスオーバーすることが音楽家の宿命なのだ。アイスランド響の楽団員でもない限り音楽演奏だけで生活することは難しいため、腕はプロ級でも音楽はあくまでも趣味としている者も少なくない。そんな環境が功を奏してか、流行に媚びず、心のままに制作されたユニークな音楽が生まれていく。

そうして個性を放つアイスランドのインディーズ・アーティストの活躍が目立ち始めた2006年、圧倒的なクオリティを誇る音楽集団が登場した。それがベッドルーム・コミュニティ・レーベルだ。ビョークのコラボレーターを10年間務めた**ヴァルゲイル・シングルズ・ソン**を中心に設立されたアーティスト集団には、ニューヨーク出身で現代作曲家の**ニコ・ミュリー**とオーストラリア出身の**ベン・フロスト**も所属した。このレーベルは「気が合うこと」が第一なので、ジャンルも国籍も不問。カントリー・シンガーも、ダーク・ノイズも、クラシック・コンポーザーもみな同じ土俵に立つ。ダニエルはドイツ留学後に加わり、「ヴァルゲイルとは以前からの知り合いで、自然の成り行きでレーベルに所属することになった」そうだ。

ダニエルは音楽家として八面六臂に活躍している。筆者が最初に会ったのはピアノ奏者としてであり、2009年当時アンサンブルへの楽曲提供や劇場オケの指揮で頭角を現し始めた彼は、味のあるピアノを弾くとも評判だった。そこで筆者がアイスランドでコーディネートしたレコーディングを手伝ってもらうことにした。カジュアルなジャケット姿で現れた長身の彼は、芸術家然とした鋭い光を目に宿す人物で、レコーディング中はさすがに緊張感が伝わってきたが、話してみれば気さくで柔和な人物だった。



©Börkur Sigbórssón
アイスランド交響楽団を指揮するダニエル

Symphony Lounge [シンフォニー・ラウンジ] ジャンルなき孤島、アイスランド音楽のいま

その時に彼と話した内容は残念ながら覚えていないが、この秋日本で公演を行うというので、以前から尋ねたいと思っていたことを率直に投げげてみた。それは、ダニエル自身が自分をどのようなアーティストとして捉えているかということである。

「自分は一にも二にもミュージシャンだ。作曲家や指揮者、コラボレーターに関して境界線は引いていない。どのような役割を担うにしても、私は私でしかない。異なる役割をこなすことで、まだ表に出ていない自分の側面を表現することができるようになる」

そしてマルチな活動をする中でも「私は自作曲を指揮するのが好きだ。曲に親しみがあるし、自作曲であるからこそその解釈の自由も感じる。指揮を担当する他の楽曲に関しても、そのようなアプローチが最善だと思っている。音楽の解釈に成功するためには、演奏曲に親近感を覚え、繋がりをもつ必要がある。ある意味、指揮者であれば指揮をとる全ての楽曲が、自作曲のように感じる努力をするべきだと思う」と語る。

そのような音楽哲学を持つダニエル指揮の、日本でのシヨスタコーヴィチが期待されるところだが、同様に東京交響楽団により初演される彼の自作曲《ブロー・ブライト》も注目したい。「エネルギーで明るい曲なので、コンサートのオープニングとして適していると思い推薦した。東京交響楽団とは自作曲を取りあげたいと話していたこともあり、日本での初演を嬉しく思っている」

2013年にグスターボ・ドゥダメル指揮ロサン

ゼルス・フィルハーモニックで初演されたこの曲は、間もなくリリースされるアルバムにアイスランド交響楽団のライブ録音で収録されるといふ。日本での演奏に関して尋ねると、「どのオーケストラも独自のアプローチと響きを持っているものだ。楽曲の様々な要素はオーケストラの持つ特徴に準じて強調されることが多く、徐々にそのオケの響きに仕上がっていく。東京交響楽団とこの作品を作り上げていくことを、今回はとても楽しみにしている」と語った。

近年の彼は新進の指揮者、作曲家として大変に忙しく、ロサンゼルス・フィル、アイスランド交響楽団、トスカーナ管弦楽団、ハンプルク交響楽団、BBCフィル、トロント交響楽団他、数多くの欧米のオーケストラとの仕事に加え、今年8月にはデンマーク国立オペラに初オペラを書き下ろし大成功を取っている。そんな中での来日は「武生音楽祭で2003年に日本を訪れたが東京は今回が初めて」であり、実は日本食の大ファンなので、日本食も東京も堪能したいという。

ダニエル・ビャルナソンの日本でのアーティスト活動の輝かしい第一歩を、ぜひお楽しみいただきたい。

COLUMN アイランドの名前事情

アイスランド人に対してはファーストネームで呼んだ方が喜ばれるかもしれない。というのも、ビャルナソンは「ビャルナルさんの息子」という意味にすぎず、自分本来の名前はダニエルのみだからだ。

アイスランド人の名前は通常、父親の名前＋息子(son)または娘(dottir = daughter)がラストネームとしてつく。また、結婚しても名前が変わらないため、例えば男女の子供がいる4人家族の場合、全員が違うラストネームになりがちだ。ラストネームで呼ばれても自分ではないような気がするという人も多く、大統領に対してもファーストネームの呼び捨てが当たり前。むしろラストネームだけでは失礼に感じられるようである。